すむし

よくふえ　并

哥と詞を居とする

[V.38]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 38
copy 1
Asian
Japan
Case

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

2004551302

夜ばんちすれ金の盗に入道の姫女の御持仏ども
あらりいでゐる供養をさせ給ふこのゝびにおとゞの
恵の御心ざしにて御念俑ざうのぐども二夜ゐる
とゝのへさをゐるをやがてしつらもを給ふもゝの
さ夜などなつしうちろことなるゝの銚を
えしひぬりをゐり むしさ紀のうぞいそぎをさせ
給ける 並づく恵のおほひなどのおしき めぞめも
なつしうきよしなるにほひそめつけられたる
心ぢへめなれぬさ夜なりよるの三丁のゝびらを
よおもてながしあげてうしろの方に法花の昇陀羅
かけなりてしろうのもれがゐるにうくことく

しき。菩の文をとくのへてなれり。名番(ミヤウバン)はいかしらの
百ぶのくのえうをとゝきぬへり。おうぶ仏。けうじ(いき主の仏之)失
菩薩(ぼさつ)をのくびやくぶんしていくりなりしうる。二海
りまういくしげなり。おうの奥(ぐ)は例のきもやかり
ちいさくて。おをきしろき。葉のもちすをとくのへて。
かえうのほうを合ふる名番。こちをかくしほろ
ぶて。こきはほりしうる。ひとつかなりは白ひおひて。
いとなつし。理は六道(ろくぶう)の衣生(さぶう)のこめは。六身(ぶ)かしせ給
て。三づしのれぢ理は。院(ほ)ずれ手いかしかしせ給
ける。これをこゝは此世の結縁(ゆいゑん)まて。かゝるはなびき
かはしぬべき心を。雅文(ぐんゑん)はいくしをこまへり。さて、

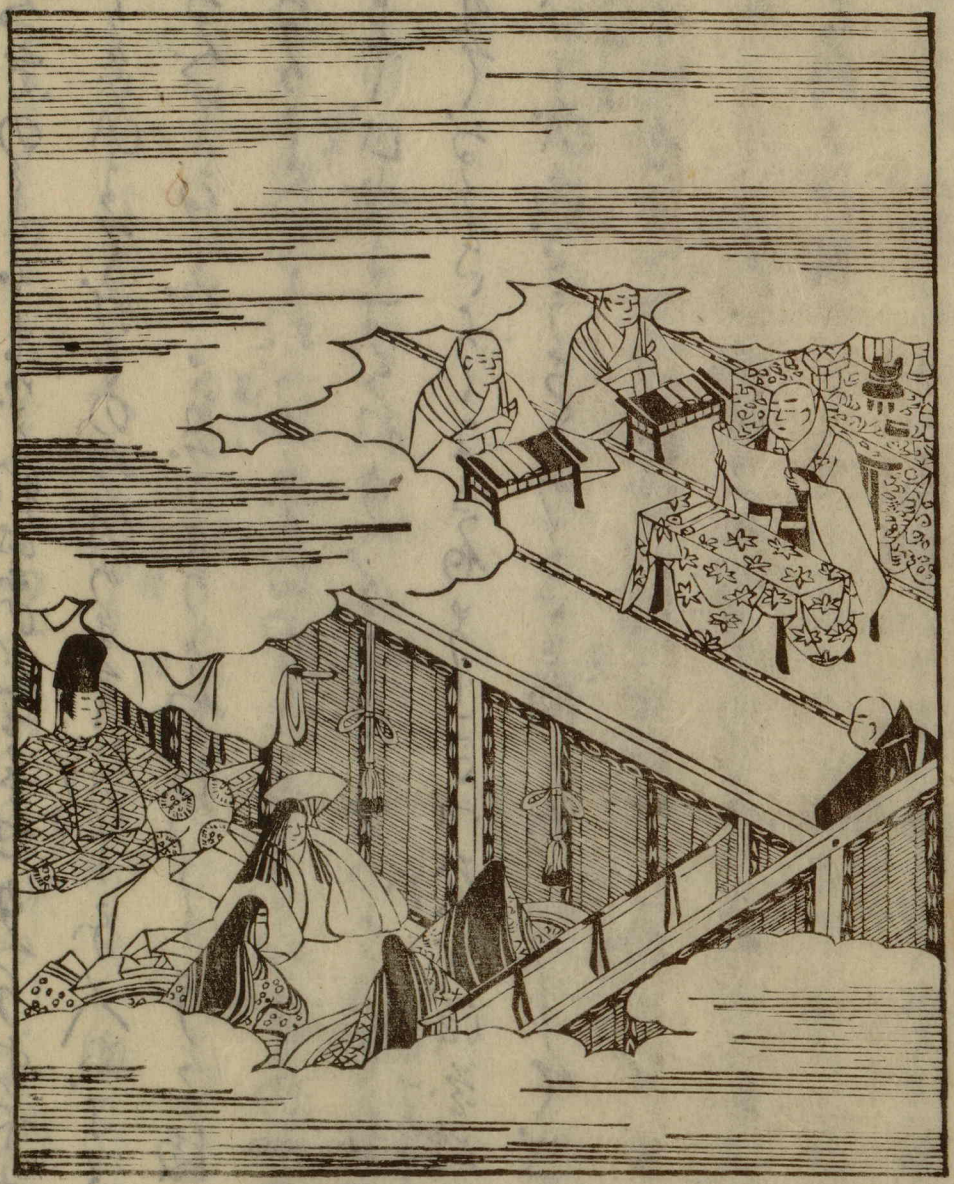
阿弥陀經。かしのこゝにもろくて。朝夕の出て（立ノ）なし
まもいかゞとて。かんやの人をめして。（源ノ）ことは仰事
ゐひて。心ことはきゝかしまするをゐへるに。これ雲の
比ほひより。此心とゞめていそぎかしせしまへるかひ
ありて。うしとゝ給へゞ。めもしくやきまどひ給ふ。
けかけしかゐのすぢよりも。すゝつきのうへに
うやくさ海なども。いとなんめづらかなりけり。軸（ぢく）
へうし箱のさ海などいへばさしなりし。これにことは
ぢんのけそくのつくゑにすへて。仏のれおなじ
ちやうぶいのしまかぎられしまへり。ぞうかぎ
してく。諫師（かうじ）まうのぼりぎやうのへぐまいり

けどひぬへど、(係)院もあるゝに出給とて、(主)家のおりし
ますましのひさしにのぞきぬへれば、をばき心ち
すゝりの内しつゝひに、前をくあつげなるまで、
ことくしくゆうぞきたる女房め六十人ばかり
つどひたり、きたのひさしのすのこまで、ひらへん
などはさ間よふひとりどもあまたしてそつたき
まであふぎちらをば、(係ノ)さしよりぬひて、(詞)そらにてくは
いづくの煙ぞと、しつれぬとそよけれ、(ふじ)富士のこれ
よりもげにくゆりこち出たるは、ほいなきしぎなり、
(諸説ヘ)うきちのありは、大方のありをしげめて、のどうに
まれて心もきてつくべきことなれば、ちどうりなき

きぬの着なひ、人のけちひしげめてなんよりうべき
など、例の抽ゆくらぬワカ人どもの、月さとしへ
給、安い人げまとされめて、いとらいさくおりしげ
にそひれかしめへり、源氏 恵ノ多 ちうがワしかしん、いぶき
かくしまれなどの給、小地のミさうじもとりもなちて、
三寸かけたりそなるに人ぐもいれ給、源しげめて、三ヤ
にも抽の心しりめべきしたるかたをきこししを
給、いとあれにこ也、三ノ おましをゆづりめへる佛の所
しつしひこや 源ノ 里給も、ん さ両ぐに、河 かうかたの所いとなる
とも、まろともにいそがん、まれとはしようざりし
ことなり、よし後の世にしぶに、かれもれのなりし

やどりに、滿なくとおもほをとて、うちなきぬれ
ちちすぶ紫をおるじうてなと賛をきてつ田の
けるしうふぞかるしき、とれ祝にさしぬらして
うう深なるれ扇にかきつけぬへり、こや
へぐてなく蓮のやどをちぐりてもきこゝが心や
すましとすらん、とうきぬへれど、いふかひなくを
おもほしへぐすかなと、うちけしひなぐら、れ衣と
袖をおもほしたるれ氣色なり、例のこゝろなどに
いとあまた氣りぬへりれうたぐより、これもくと
いとなき出たまへるれ、ほうもちの御りに海こゝろ
とに、どしろをきまでこ田、七僧の法服など、すべて

大方のことにもいこれ出家の上をさせぬ人ゆゑ
よそひまて、けさのぬひめまで、こしゐ人ハ、よ
なべてなしずとめでやりとや、むつしうこ海ゥ
なることだかれ、講師うじのいとこうとく、ことの心を
よて、此世ますぐれぬ人るさりをいとひたまれ
なて、なぐさらこまこもまじこさ山契を法華經ま
むすび給、こうさくふるさ海をあらいして、こぐ
今の世にざえもすぐれ、ゆゑけさささらをいとに
心していひつゞけるいとこうとそれバこれ人ご
ちほこれ給



これもたゞ志のびて此念誦堂のもしゞめとな
ばしたることなれど、うちたりも山のこうども
きたしめして、これ此つゝひどもあり此誦經のふを
なぐいと所をきまで、まもりなんことひろぐり
ける、僧よまうけさせめへりけることゞもそぐと
ばし志かど、よれつゝなしざりけるを、まいていま
めしきことゞもれくもく里これぞ、夕の寺に
をきぶ所なげなるまで、所をきいきほひになりてなん、
僧どもいかへりける、今しも心ぐるしきれこそ
ひて、もりもなくかしづき罪ゝ給、僧の此かどハ、
この此そうぶんのこやうすこもなれ給なんも

つねのことまでめやすりぬべく罪ぬへど。よそ
よそまでハおぼけりなるべし。明言えてまつり。
罪しうけ給ひしことをそうんに。ほひこぶひぬ
べし。げにありもてぬ世いくばくあるまじかれど
なほいける限の心ざしをぞ。うしなひもてじと
ほそし給つ。かれ家（三条ノ）をいとこ後うにほそよりに
けらせ給。（女三ノ知行ヘ）こふの地どもくまぐの御さう（法座之）。みまき
などよりなる地どももうぐしきこ後のハ。これ
かれ三条の家の御蔵（ミクラ）におさめさせ給。まこもこそ
そへさをぬて。こ後ぐの御ぬりもれども。（朱）院志
御そうぶんにかぎまるく給りぬへるなど。あるる

ざ海の拙ハ。これかれ家(三条)まもとしびけるし。ふ海りは
いかしうしをかを給。明蓋のれりしづき。そこしの
女房のことぐも。かゝ志もれもぐくしは。なしなべて
ワ(添)がれあつかひまてなん。いそぎ川かうまいしせ
ゐひけり。秋比(六条院女三ノ方之)ましのまゝ。殿のまへのあれ。屋ハ志。
東のきはをなしなべて。明るつくしをゐへり。おろ乃
こゝろくだして。そのゝまゝ志なきをゐへる。れ志つしひ
などいとな海めきたり。れ(女三ノ)弟子まゝ志ひ。宮ゝしろ
尾どもれめれとゆかべどもはさるもれまて。ゆかさ
さりのも。こゝろさゝまり。さりかゝまてよをつ
くしいべき限ハ。えり(添)てなんなさせ給けり。さる

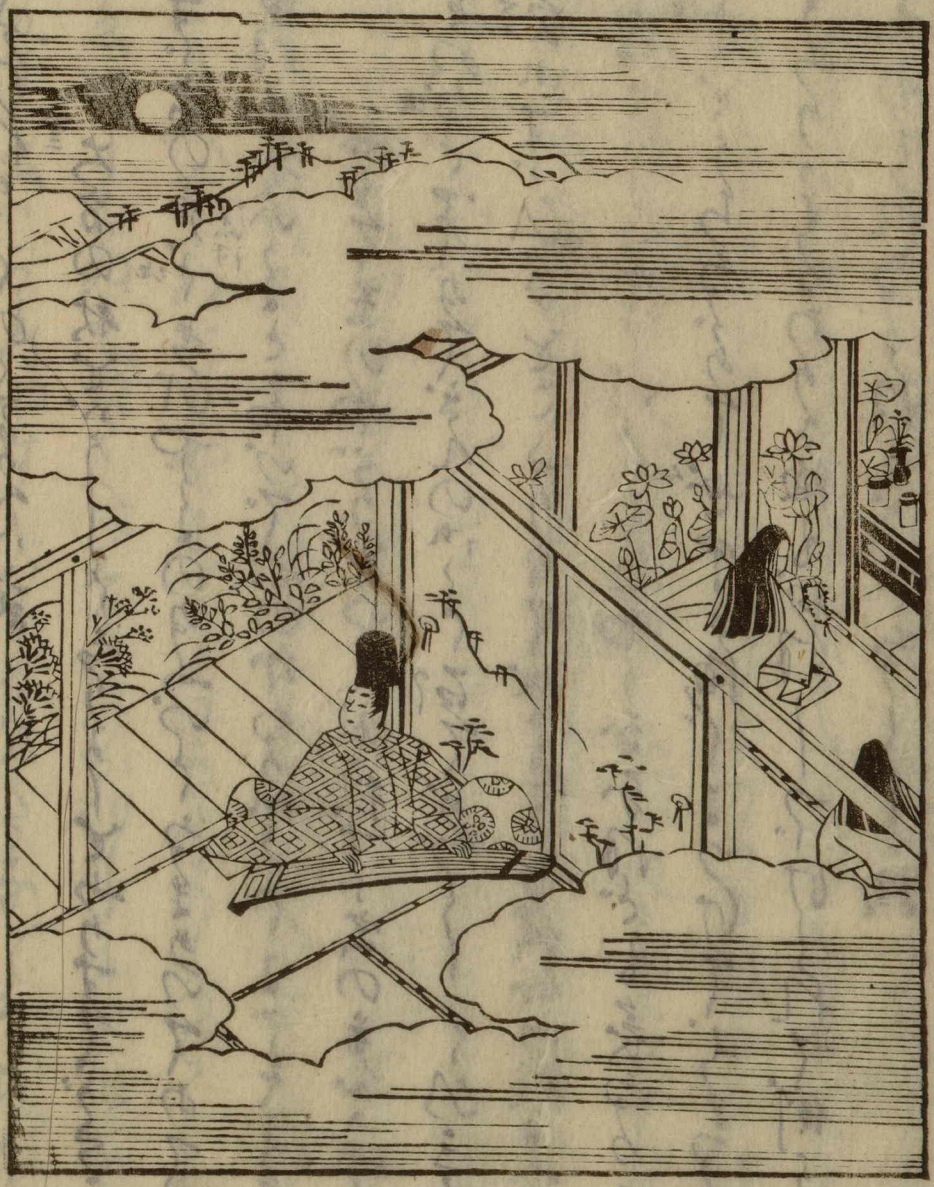
きをひまは我もくとさしろひけれど（源）おとゞの君
きこしめして（詞）おろまじきことなりこゝろなしぬ人
すらしもまぢりぬれば（かゝ）人のひとくらしうおハ
あもしききこえ出くるけざなりと。いさ先なて。
十よ人ばかりのほどぞかゝちことまてもさふらふ。
この堂まむしどももなるをなひて。風すこし（源）きく
なりけり夕暮に（源ノ）けるりなて。虫の音きくなふやう
まてなる代せもなれぬさ海と異しなやましなへば。
例（女二ハ）のれこゝろはおろまじきことまこそおなれと。
ひとへまむつらしきことまに異しなへり。（地）ひとめま
こそかもることなく（源ノ）まてなし語しがうちまは

うさ紙しり給気色しるく。こよなうかりましれ心を
いうぞ（女三ノ）こしなしじのれ心にて。おほうもしひなり
給ひしれ世のそむきなれば。今はもてもなれて心
やすさに。なほかやうになど（源ノ）宮しなぞ（女三ノ）くるしうて。
ひとぞなれこゝんれすまねにもがなすぞおぼし
なれど。とよすがてえさもしねゝ給ひず。十（八月）五夜の
月のまぶ乳かくしこゝ夕宮に。仏のおまへに（女三）宮おりし
てもしちうなぐめ給つくねんずし給。つゝき尾ぶしこち
二三人学なりとて。なしすあぐさのとと。水れをもひな
ど。罗ゆかさ皮かもりこゝいとしなこゝに（洞）こしぎあへる
いと哀なりに。例の（源ノ）つゝりまて。出（河）のひいとしげう

こゞるゝゆゑべかるとて。我も志のびてうちずじ
給。地おこゞのぶをいとこうとくほのぐきも。げ(源公)は
しゑぐ男しころなるゝ。すぐむしのふり出たる程
もちやうはおかし。秋(詞)の虫のこゑいづれとなき中に。
松虫のなんすぐれたるとて。中(秋好)宮のけうそき堂へを
かて。いとつぎとこゞ口とりつゝもちたをこまへる。
志るくなきつゝふるとそすくなるなれ。松虫ノ子(名)にはこが
ひて。食の程もちゝきむしにぞあるべき心にまゝ
をて人きゝぬたくやま。もうけき堂のまつぢしに。
こゑおしまぬもいとへぐて心あるむしになんを
けり。すぐ虫いころやすくいまめひたるこそらう

たけれなどのたまへば。文

文三 大方の秋をばうしとしりましをかりすてがたき
すゞ虫の声と地悪びやうのまふいとなまめいてあてに
おほとかやいかまとかやいで心のかなれことにこそもて
心まて草のやどりをいとへだれすゞ虫の声ぞかり
をぬなど地笑しまてぎんのれこと石てめづらしくひき給。
文三 れずゞひきをこゝりまてれことにまな代心いれまへり。
自さしいでゝいとをもやうなかほども衰なるに。
本 とうちながめて世中さ海ぐにつけてもうちなく
うつりかゝるありさ海もおぼしつゞけられて例より
もあはれなるねにかきなしし給



と我ハれいの此あそびまやあらんと。をしもう
まして。芸のうやはうりうまへり。大ねのさえ。敬
ぶべのうるべきなどぐしてまいりうまへれば。
こゝろまおりしますと。此ことの事をさぶねて
やがてまいり給。いとつれぐまて。まぐとあそび
とはなくとも。久しくうえまうめづらしき地の
孫なぐ。きる夜ほしかりつるひとりごと給。いとよう
君給けるとて。こやもこゝろまおましよそひていれ
ぬり給。うちの此まへに。と我ハ月の夏あるべかり
つるを。とまりてさうぐしかりけるに。此院より
んぐ。まりぬふと望つるへて。これかれ上達ありなど

まいりぬへり。むしの□のさゝめをしぬて。れこと
どもの声ごゝきあまをて。おもしろき程に月（源詞）
こゝろ宵（去）のいつとても抽衣ならぬありはなき中に。
こゝろひのあしるなる月の夜にハげにな後ワが世の日
かまでこそよろづ志ながさられ。右（柏）樽大納言なるの
ありくにも。おさまつけて。いとゞ志のぞなくこと
おほく。おほやけはさくし。ものゝありかしの夕ひうせ
こゝろこちこそすれ。鶯鳥の夜にも春にもおもひ
ワきまへ。いかゝひあるるのいとうるさうをし
もれをなどの給ひて。こゞりしもうきあまを給れ
琴の□にも袖ぬしぬけ。（女三）寺（他）のうちにも。こゝ

とめてやさしく給ふとかうつくしのれにろまは（源ノ）
おぼしおぼしかうれ遊び（みおそ）のほどはまづ忘らう。
（全）内なども（柏と）おぼしいでける（源判）にひいずもし乃
えんまておもしろんと思ふしのくすのふれけ（池）
かくつゝりゆきりまいる殿ま。冷泉院よりまれをう
そこありれ（全上）前のれあそびまはりまとまりめちぜ。くらう
おしかりて・（け二人脱とも有）ただ大弁式部大輔・まろ人ゞひきみて。
きうへさゝ（冷へ）ぶりまつりされば・（夕）大将などは・六条院ト
きこえ給ふと・（冷）ききこえしめしておりけり
（冷）雲のうへをかけはなれたるすみかにも物わすれ
せぬ秋の夜の月おなじくらとききこえおもへれど。

あまたゝび取きさ君のほどもあへずあひし。今は
のどやかにおはしますまじ。まいりなどしてもお
さなきおさなき紙ほいかなきことゝおぼしあまりて。
おどろくさをおくへるかくしげなしとぞ。またいうあう
やうあれど。まいり給はんとす
なかなかにおもひあまり雲井まではしおぼしめる宮
うしの秋ぞかはれる。池こともなかりけれど。
うらむうしつかれはありさ夜のおぼしつゞけられ
けりまうあり。使まさうづきみて。ろくいと
まはし。人ぐの車。志ずゝ木のまへるひきあたしはだ
前の人ぐもちこゑて。ぶげ也りつかはあそびまゐ

れて出たまひぬ。流の御車に、蛍なり。大将、左衛門督、拍ノ牙を人
藤宰相などおりしけり限られ乗り給ふなりしにて
うろくかなりけれよそひどもなれば、流るがさるぞかり
なりくもへて月やうさしあがり、かけぬりそら
面白きに、つきへで笛などつぎとなくかをのひ
などして、悪びたりけれまいりのさ海なり。うなもし
うるべきなりかしは前をくらぶけ紀ぞしたる
川くしてかたうにけんだられ給ふまいりしへの
たゝへざ海におぼしかへりて、こゝろひもうりぐ
しきやうに、かとりくまいりたまへれど、冷ん
おどろき鈎ようとび罪し給ふ。冷世三ヶ之地 ぬびとのひのへるれ

うちいよくこと拙ならずいうじきれさうりの
よ紙はこころと思しすてゝ志げかなるは無猶
衰すくなからず。そのよれうるどもかしのもやまと
のもこころぞへかうおもしろくのこなんれいのこ
とゝしぬかるさしいまゐぶもかるさしいるくて
なん。明がるゝ（詩歌奴づし）ふこなどかうぞてどくへぐまうで給。
云（源）象院は中（秋好）家の此方につゝりなて此拙ぞなど罪
給。今（源詞）いかうさげかなるはすまゐり。さばくも
まいりぬべくおまとはなけれど。すぐるよもひまそ
へて。ますれぬ昔のれもはがうりなどうけ給はり罪
まほしうさしまへるにおまかしもつゝぬ方の無猶

廿十二

まてさすがにうぬくしつくさころをくも侍てなん。
我より後の人ぐにかたぐにつけて（柏ちどのるし）をくれ引心ち
し侍もいとつゆなきられこころぼそきれのどれ
がこうおぼく侍れば世（深遠世ノ事）ぢなれこうすまねにもやと。
やうくしひこちぬるを。御りの人ぐの（裳明石ゆれ）もれもうれ
うれ（私好ニ）こぐにいし給ると。さ紀ぐもきてつくし心（私好ノ）
こがへずおぼしとぐめて。抱きさせこまへなど。まめ
やかなるさ海にきてしさを給。（私好ノ体）例のいとつうおぼ
とかなるれけもひにて。（討）こゝのへのへぐてかうう
侍し（しかと云心之）年ぐにうりも。おぼつかなきれまさらやうなり。
しのへしうしきを。いとしれ和にむけうして。

これ人のそむきけ世をいとりしうちひなることも
侍ながら。そ心のうち紙(添へ)罪しさをうけ給ちし。にはなる
ことも先これもしきけ(添詞)ゆはきてさをなしひて。
いぶきく侍ときそ給げ(添詞)ゆはやけざ侍にてに恨
あるありかしのれさとねもいとようまちつけ罪し
さをしをい侍にはなるごとにつけてかは此心ありまりせ
させ給れうけろひも侍しん。さぶめなき世といひ
ながらも。さしていとしきことなき人にさいや
うにそむきそなるしもありがたう。心やすうべき
ほどにつけてざる。をのづらしむりづらふほどし
のも侍紙ながらそひとまり。にきをふれ居心(ざうえん)もが

ありてひがくしきうをしちうり罪しさすり人を
こそ得れかけてもいとめりまじきれことまなんと
罪し給ひ秋好ん あらうもくこちうり給ひぬなめりかしと
つらうせひきこえ給ひ秋好ノ母 故れ息前の御男のうるしうぬ
給ふんまさ御いりなり 燒(ひかり)のなりまどひ毎まふ
らん なきうげまても人ようとまれなり給ひ名のり
などのいできたりけることかれ 院(源)まはいうじう
うし給けりをなのづし人のうちさがなくて
つゝへきうしめしけり後いとなるしういうじうて
なべての世のいとりしく覚しなりてかりまても
かれのまひかんま様のくりしうきう御ほしき紙

まかりはえうち出きてし給ひて、ふぐ(秋好詞)なき人の(法見不ノモノ)は
ありさ海のつゝかろかるぬさ海にはのさくことの
侍しを、さりしるしあらはなしでもなしきりつ
べきことに侍りかれど、をられし程の衰ぞかりを
ますれぬことにて、拙(後世ノ事)のあるさまへやしぎりけるが
拙ふかれさ紙いつでらうひきをん人のすゝめ
をもきて侍て、こづしぶまかれはのかをもさまし
侍ましがあるとやうくいもりまあんさしくなく
こともなけるなどかすめつゝぞの給ひ(深心)ばにさも覚し
ぬべきことに、衰にはなりまて、そ(詞)のはのかあん(誰れ)
ものかりまじきことにしりながし、朝つものうれる

ほどいはひ捨られ給ひぬにあれ。目連が仏にちうき
ひだりの身にてさちまちますくひかんこあしまも。
えつかせ給いざしん地かし。玉のかんざしすてさを
給いんも。この世にいうしゝのうちやうなるわざなり。
やうくさうれこころざしをしめなて。かれれかふる
ちうくべきことに低をさせかへ。しかしかふること給り
ながし。地さはかしきやうに。しげかなるほいもなさ
やうなるありさ海に。あけくしし給りけるこづうら
のけとあまそへて。今しげかなとしひかふるもげに
しそこころおさなきことなれなど。世中なべてもか
なくいとひすてまほしきことを。実しかりしかへど

なる所やけしまくきれ男のありさ海どもなり。よんぞ
うち志のびてかやすりしれありさけさはおし
まれなて。上達ア。なども来りなへるかぎりいこれれ
どくりつつうまつり給。藍家の女れのれあるさ海乃
なしびなくいつきこてこまへるうひぐしさも。
大ねのまるいと人ましなりれさ海なとも。いづれと
なくめやすしとおぼすに。なる所この法泉院と志男に
給れ心ざしいすぐれて。かく衰こそおぼし給。院も
つるにいぶしうち男に給しまれ對面のまれ
いぶきうのミおぼされけるに。いそがされなてかく
こころやすきさ海にとえし女にけるになん。中宮ぞ

中くまでは給こともいとかたうなるとて、ふて人の
なれやうなるしびおりしますよ。いまめしう中
中むかしよりも菜やうよ。はあそびをもしおふ。
なるよごともはこうろやれうありさ海なるべし。ふぐかの
こや其前のはこと紙おぼしやりつゝをこなひ乃
はしすこうくうを人のゆりしきて給まじき
ことなれば。功徳のこと紙をそしおぼしいとなる。
いとゞこうろふかう。世中をおぼしとれうさ海に
なりまさり給。六条院ともはろごろにいそぎ給
てはハ海なるゞをこなるを給とぞ

69038
6AP78